

組合士 アラカルト

東京トラック同盟協同組合

理事・事務局長

よしだしんや
吉田信也さん

組合原点への回帰を目指す新事業に取り組む

「運輸業界は厳しい淘汰にさらされていきます。組合員各社の多くは目先の状況に囚われてしまい、冷静に自己分析して対応を図ることが難しくなっています。それだけに、業界の状況を把握し、かつ、客観的に分析できる立場にある組合と事務局の存在が重要性を増していると受け止めています」。こう語るのは、東京トラック同盟協同組合理事・事務局長の吉田信也さんである。

では、これからの組合の位置づけと役割はどのようになるのか。吉田さんは「組合事業で言えば、従来からの経済事業以上に教育情報といった非経済事業に力を入れる」ことだという。具体的には、経営者、経営幹部、中間管理職など、各職員各職層なりに自分たちの仕事の原点に立ち戻ってもらい、運輸業の品質とは何かを組合員各社に確認してもらおう。一言で言えば「運輸業の品質改善」の実現へ向けて必要な情報提供や手助けをしていく。「これが事務局の役割」と位置づけ、今後の組合運営の基本に据えていくと企画に着手しつつあるという。

新事業へシフトの時期

同組合の設立は昭和29年であるが、歴

史は古く、組合の前身は戦前の牛馬を使用した荷役運送事業者の団体にたどり着く。組合ビルの際にある「馬頭観世音」の石碑は、東京大空襲で「見殺しにはできない」と放したものの、大半が焼死した牛や馬を悼み、戦後になって建立したのだという。また、都内有数のビジネス街の一つである東陽町から一筋入った現在の組合周辺は、立ち並ぶマンションの間を公園の遊水と桜並木が縫う、閑静な一帯となっている。しかし、昭和30年代まではトラックと共に牛や馬も活躍する運送業者の集積地だったという。

現在の組合員数は81社。大は約2000台を保有するところから小は保有1台まで、規模は各社各様である。

組合では従来、これらの組合員に対して、高速道路事業、ユニフォームや安全靴、運送関連の副資材等の物販や金融事業、保険事業など、「規模のメリット」を活用した経済事業を主に提供してきた。しかし、「インターネットで注文すれば翌日にはユニフォームが1着から届き、しかも、組合価格よりも安い」民間事業者との競争時代を迎え、「モノに関わる事業には限界が生じている」と、もはや経済事業だけで組合を運営していくのは難しいと吉田さんは判断している。

そこで、今後は教育情報事業を主体と

した「非経済事業」に力を注いでいきたい。これが吉田さんの組合運営戦略である。組合員各社にとっては「企業のマンパワー、経営トップから社員の一人ひとりまでが仕事に対するモチベーションをアップして、10人で15人の働きができるような環境整備が何よりも大切となっている」からであり、「業界情報や各社の状況を把握している組合事務局はこのような部分のサポートをすることで、貸借対照表には現れない効果を提供したい」と考えてのことである。幸い、組合ビルを有し、テナント収入もある組合の経済基盤がしっかりしている今が、非経済事業へのシフトのチャンスだととらえているのである。

組合士たるもの専門性の高い「得意分野」を持つ

同組合への奉職11年を超えるという吉田さんは、元は商工中金の職員として多くの組合をサポートしてきた経験を持ち、商工中金や中央会など組合関連の支援・指導ネットワークは幅広い。さらに組合の地元商工会議所加盟により、従来とはまた異なる情報への接点も広がっている。また、以前に勤めていた組合では、業界の全国団体化の実務にも事務方の中心として関わった経験を持つ。吉田さんは

ここで「一丸になるという組合の原点を経験した」と言う。「業界、そこに所属する各社の事業の力になるものを共につくる。これが組合の原点であり、企業一つひとつの力とは人を育てることであり、そこに資することが組合だと実感した」のだそう。

それらの情報ネットワークや経験も踏まえて「組合員のニーズをいかにとらえ結びつけ形にしていこうか。これが組合士として一番大切なことだ」と指摘する。「それは組合員各社の問題の整理整頓をし、その解決の入り口をガイダンスできることと言いつてもいい。そういう役割を果たすには組合士に加えて別の資格、得意分野を持つくらい専門性を身につける覚悟と実行も必要ではないでしょうか」という吉田さん。

このように考えている吉田さんは、自ら社会保険労務士の資格も有し、「組合員各社の人づくりに資したい」と組合としての新事業の新たな展開を企画、冒頭の発言に繋がるのである。

今年度から4〜5年計画で「できることから少しずつ、しかし、着実に実現していきたい。今年はその初めの一歩にしたい」と吉田さんは考えている。

